枕頭の書

昭和四十六年六月二十五日　発行
昭和四十六年九月　三十　日　三刷

定価　六〇〇円

著書　福永武彦

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一一一(大代)
〒一六二　振替東京八〇八

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替え致します。

印刷　株式会社三秀舎　製本　植木製本所
© Takehiko Fukunaga Printed in Japan, 1971

目次

読書漫筆 7

読書遍歴 9　机辺小閑 13

探偵小説の愉しみ 26　探偵小説と批評 32

ロマンの愉しみ 37　今ハ昔 46

本を愉しむ 51　推理小説とSF 61

枕頭の書 65

文人雅人 69

夷斎先生 71　川上澄生さんのこと 78

仲間の面々　81　柳田國男と心情の論理　86
懐しい鏡花　90　芥川龍之介と自殺　94
堀辰雄に学んだこと　98
折口信夫と古代への指向　103　花の縁　107
内田百閒さんの本　111　和様三銃士見立て　116
会津八一の書　119　現世一切夢幻也　123
或るレクイエム　126

身辺一冊の本　131

東洋的　133　純粋小説　135　危険な芸術　137
鷗外の文章　141　「大菩薩峠」の二三の特徴　143

私の古典「悪の華」 146　現代地獄篇 149
「堤中納言物語」 151　記紀歌謡四首 154
古代の魅力 158　「萩原朔太郎詩集」 162
「李陵」 166　頭脳の体操 169
「東海道中膝栗毛」 172　「珊瑚集」の思い出 175
辞典の話 181　「車塵集」のことなど 183
十人十訳 187　一冊きりの本 191
趣味的な文学史 192　ヘンリー・ミラーの絵 196
リルケと私 199　材料としての「今昔物語」 202
「月と六ペンス」雑感 206　「式子内親王」 211

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

足跡 215

夢想と実現 217　芸術と生活とについて 222

泉のほとり 225　取材旅行 230　能登一の宮 234

見る型と見ない型 239　海市再訪 244

掲載紙誌一覧 249

後記 252

福永武彦

第三随筆集

讀書漫筆

読書遍歴

僕は大学を出てから相当に色んな職業も経験したし、また病気で長らく療養所の生活も送ったが、僕なりに人生を形成した方向というものを考えるとそれは高等学校と大学との学生時代に決定されたように思われる。そしてその形成の大きな要素の一つとして、書物というものを離れて青春を考えることは出来ない。これは決して学生時代がよかったとか、恵まれていたとかいう懐古的な意味ではない。書物を読む習慣が、後の人生の方向を決定する動機になることはあり得るだろう。またその習慣が、僕等の感受性がまだ新鮮な頃に、始められなければならないことは言を俟たない。

僕が高等学校にはいってまず感じたのは、読書の自由だった。というのは、中学生の頃、僕が親父から与えられていた書物は「漱石全集」と逍遙訳の「シェークスピア全集」、それにアーサー・ミー編纂の「少年百科事典」の三種類くらいのものだった。たしか中学二年の頃、こっそり古本屋から円本の「谷崎潤一郎集」を買って来て、それが親父にばれて大層困ったことがある。何しろ必要以外に小遣いを貰う習慣がなかったから、この時も友達に借りて来たと言

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ってごまかしたがそれならすぐ行って返して来いと叱られて、本を持ったまま夜の街をうろうろした。きっと昼飯のパン代か何かを節約して買ったものだろう。

ところで高等学校の寄宿舎にはいると、学校には図書館があるし（中学のそれと較べると、荘厳そのもので中へはいっただけで身顫いした）、寮にも図書室がある。小遣いもちゃんと貰っているし、週末に自宅へ帰ると「トメ食」と言ってその分の賄費が返却される。それで夢中になって本を買ったり借りたりし始めた。完全な雑学である。但しフランス語の主任教授が石川剛先生で、独特の教授法によって一年の一学期で初等文法がひとわたり終るから、そのために夏休みにはもう原書が読めるようになった。僕はこの夏休みにメリメの「モザイク」を買って来て、辞書と訳本とを首っぴきであらかた読みあげたが、そのあとは手当り次第に読み耽った。ドストイェフスキイの「白痴」の仏訳などは、メリメに引き続いて読んでひどく感激した覚えがある。ボードレールやランボーも、原書を買って来て紙ナイフで頁を切る時の嬉しさといったらなかった。

ところで詩集を読むようになった初め、というか詩に眼を開かれた初めは、萩原朔太郎である。寄宿寮の図書室で、恐らくは出たばかりの「氷島」を読み、魂をゆすぶられた。続いて「青猫」を読み、自分でも詩が書けるような気持がした。それから「月に吠える」を読んだのだから作者の制作順とは逆だが、それまで俳句や短歌しか知らなかったのが（実を言えば「啄木歌集」は小学生時代の最大の愛読書だったし、中学生の頃は下手な俳句をつくっていた）、

急に一段と背丈の伸びた感じになって、白秋、茂吉、杢太郎、光太郎、犀星、耿之介、賢治、などを濫読し始めた。

その一方では漱石から離れて、鏡花、荷風、龍之介などの異様な世界に惹かれた。浪漫的な方向が、青春の方向と一致したためだろう。従って鷗外のよさなどはなかなか分らなかった。改造社や春陽堂の円本全集は端から読んだが、一番凝ったのはやはり鏡花と荷風とで、これは大学時代まで、古本屋を歩き廻って安い値段の初版本を探しまわったものだ。

高等学校の三年間は、結局、摸索にすぎず、その中から独創が生れて来るというものではなかった。

僕は大学の法科の入学試験に落っこちて、それからの一年間を何となく文学に憧れながらぶらぶらした。外語へ行ってロシア語を学んだが、これはプーシュキンやドストイェフスキイのごく少しを原語で読めるようになっただけで、僕の人生をそちらへ押し曲げるまでには至らなかった。ただ原語で読まなければ、文体を論じてはならないという教訓を得た。また僕は早稲田の演劇博物館の講義などに通い、せっせと演劇や映画の勉強をしたが、そっちの方向へ自分を投げ入れるだけの勇気もまたなかった。次の年、僕は文学をやるつもりで東大の仏文科を選んだ。実のところ学者になりたいという希望も少々はあった。

大学の一年の時にはフランスの現代演劇を読んだ。しかしどうも大した傑作にもお目にかからず、オニール、及びオニール以後のアメリカ演劇の方に一層魅力を感じたので止めてしまっ

た。二年の時は象徴派の詩人たちを読んだ。ところが鈴木信太郎先生の厖大な文献蔵書類を見せていただいて、詩人になることはともかく、学者になることはとても僕のような貧書生にはむずかしいことが明かになった。三年の時は主としてフランスの現代小説を読んだ。それはまったくの濫読だったが、文学というものが少しずつ見えて来たのは、この頃からだったろう。その頃のことをもっと詳しく書くと面白いかもしれないが、読んだ本を羅列してみても始まらないからこれ位にしよう。

（昭和二十九年十一月）

机辺小閑

雑誌

趣味のいい、可愛い、それでいて筋の通った雑誌が、この頃は殆どない。それはあらゆる雑誌が商品ということを旨として、読者は必ずしも暇つぶしにだけ、或いは実用むけにだけ、雑誌を買うわけではないことを、忘れているからだろう。雑誌は何も買った以上、読まなければならない代物ではない。その点、単行本と同じく、手に取って眺め、紙質や活字を調べ、目次や本文をめくって、これは愉しそうだという予感を持ち、いずれゆっくり読むことにして大事にしまっておく、そういう雑誌もあってもいい。とにかく時間に追いかけられ、二月も早く正月が来るというような風潮だから、商品以外の雑誌は成り立たないのだろう。何しろ世の中が忙しい。

筋の通った、と言うが、文芸雑誌は文芸雑誌なりに、綜合雑誌は綜合雑誌なりに、それぞれ筋は通ったつもりだろうが、中間読物や週刊誌のはやる世の中だから、多少とも中間ずれがしたり、週刊なみに急いだり、ゆっくり落ちつくことがない。僕の言うのは、謂わば純粋雑誌といったものだが、純粋に筋が通るには、あまりに夾雑物が多すぎる。いっそ商売のためのＰＲ雑誌の「あまから」とか「洋酒天国」とかの方が、趣味的に統一されていて面白い位だ。

僕の知る限り、筋のよく通った、必ずしも趣味的でない、見事な雑誌は、永井荷風の「文明」とか、有島武郎の「泉」とか、萩原朔太郎の「生理」とか、どれも個人雑誌だった。そこには主宰者の意志しかないわけだから、単行本と変りはないようだが、どうして、雑誌は薄い内容の中にめまぐるしいヴァラエティを持っていて、その一人の作家の才能を、色んな断面から見せてくれる。他の寄稿者が書いていると、主宰者の分身に見え、その才能のひろがりとも感じられて、単行本には見られない幅がある。その一冊を手にしても愉しいのだから、全冊取り揃えたなら、きっと単行本の比ではあるまい。しかし戦後は、こういう個人雑誌はとんとないようだ。個性の強い作家が減ったせいか、出版事情がそれを許さないのか。何としても残念である。

そこで次に、グループとして筋が通ったとなると、「明星」とか「感情」とか、「四季」とかいうことになるだろう。戦後では、僕たちのやった「方舟」などは出色だと信じている。ところが同人雑誌というのは、個人雑誌のように一人だけ個性が強いのではぶちこわしで、全体の

水準を或る一定のところにきめて、そこに皆が譲歩し合わなければならない。同人の数が尠くても続かないし、多すぎれば船が山に上ることになる。しかしいっそ山に上ってもいいから、戦前の「文学界」や「四季」のような雑誌が、現在の日本文学には必要な気がする。僕なんか、書きたい作品がある時に、あの枚数という代物に縛られるために、たいてい途中でプランを変更する。情ないことだ。しかし同人雑誌で非営利的となれば、だいたい原稿料をもらえないのだから、それでは困ることも勿論だろう。

本

雑誌もそうだが、本の方も、気に入った本というのはなかなか出ないものだ。これはまったく自分の本だけに関することで、それも中身より、外側の話だ。中身はいつだって精いっぱいだから自分で自分に文句をつければいくらもあるが、それでは可哀そうだ。僕の言うのは、装幀、組、紙質などの外側の註文である。

大きな出版屋さんは、それぞれ本つくりには自信があるから僕みたいな新人の意見なんか採

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.